

J **apanese text**

2019年 春/夏号 日本語編

伝統色

「日本の色」に魅せられて

写真=小野祐次 (p.59～61、64 和紙)、森山雅智 (p.62～65)

文=編集部 文協力=森内千鶴

p.059

たとえば赤なら茜色、蘇芳色。青なら縹色、空色。黄なら刈安色、芥子色——『源氏物語』が書かれた頃、日本には趣ある名をもつ色が 200～300 も存在していました。世界史上稀なそれらの色を今の世に甦らせた人がいます。京都・伏見「染司よしおか」の五代目当主、吉岡幸雄さん。植物染めで「日本の色」を復活させたその偉業に、熱い視線が注がれています。

(p.060)

染織史家の吉岡幸雄さんによって「日本の伝統色」で染め上げられた布。各色が最も映える素材、織り、文様が施されている。2017年、イギリスのヴィクトリア & アルバート博物館に、永久コレクションとして収蔵された。

p.062

●日本の伝統色を追い求めて

朝日に照らされた山や緑の輝き、海や川が空を映した澄んだ色、四季折々の花の生命力溢れる彩り。そうした自然の一瞬一瞬に感動した日本人が、布や紙に染め表そうとした色。それが「日本の伝統色」だという。

「花のひとつひら、風に揺れる枝葉の表裏に、人々は魅せられて、それらにゆかしい名前をつけるようになったのです」と語るのは、吉岡幸雄さん。江戸時代から続く染物屋の五代目である。自らが設立した出版社を手放し、生家の「染司よしおか」を継ぐ決意をしてから30年超、工房から化学染料を排し、父親である四代目吉岡常雄さんも追求した、植物染めによる「日本の伝統色」の再現に、ひたすら取り組んできた。

2000年あまりの歴史をもつ日本の植物染め。貴重な紫草の根（紫根）を使って出す高貴な紫、蘇芳の赤、紅花の赤、支子の実で染めた赤みのある黄色、紅花の花びらと藍をあわせた紫系の色。素材によっても、かけあわせによっても、得られる色はさまざま。写真の「羊木 縹縹の屏風」は、緑を緑青、黄を刈安、赤はインド茜から得て、1300年前の日本の宝を復元した。でき栄えに「70点や」と吉岡さん。「もう少し時間を得て日本茜でやりたかった」と今なお研鑽に余念がない。

水は工房のそば、地下100メートルから汲み上げられる京都・伏見の水を使い、全国・全世界から集められた自然素材とともに、時間をかけてゆっくりと、古の色を甦らせる。「自然の植物から抽出された色には『温かさ』や『命の源』を感じさせる深みがある」と語る吉岡さん。植物の命を得、時間をかけて表出させることでしか、出せない色があるのだという。

月に1、2度は小さな旅に出る。全国の染色に使う素材の産地へ出向いて生育具合を確認し、古き良き時代に作られた美術工芸品とその故郷を訪ね、また古の色への理解を深める。幾千もの人の仕事と営みを解し、「日本の色」を究める吉岡さんの道程は、まだまだ続きそうだ。

羊木 縹縹の屏風

8世紀、聖武天皇が身近に置いていたとされる宝物を、吉岡さんが復元。2017年秋、奈良国立博物館で催された正倉院展で話題を呼んだ。

(p.063)

江戸時代後期の絵師、田中訥言による、平安時代の「王朝の色」を解説した書物を眺める吉岡さん。「いいものをいっぱい見て、たっぷり時間をかけて、いい材料を惜しみなく贅沢に使う。そうでないと本当の『日本の色』には辿り着けない」。

吉岡幸雄（よしおか・さちお）

1946年、江戸後期より染織を生業とする「染司よしおか」四代目吉岡常雄さんの長男として京都市に生まれる。大学卒業後、出版社「紫紅社」を創業。自らも筆を執りながら、琳派や正倉院の宝物、古美術、日本の風俗などに関する80冊超を刊行。42歳のときに五代目当主を継ぎ、日

本の伝統色の再現に取り組む。一方で広告・CM制作者、展覧会プロデューサーとしての顔もち、成田空港や溜池山王駅のアートディレクションも手がけている。主な著作に『日本の色を染める』（岩波新書）、『日本の色辞典』（紫紅社）など。

p.064

●伝統の色は未来の色

文＝吉岡幸雄

厳しい寒さのなかでも、わずかずつ春のきざしを感じるようになってくる。そのような頃に、新たなる年を迎える。「松竹梅」すなわち「さいかんのさんゆう歳寒三友」が人の心をなぐさめてくれる。

奈良東大寺二月堂で行われる修二会（お水取り）に鎮座する、秘仏十一面観音に捧げる椿の造り花の染色作業にとりかかるのである。その行法は西暦七五二年二月に始まり、今日まで一回たりとも休まずに行われている。造り花の和紙を納めて五十年あまり。今も先人たちが見出した手法に基づいて染める。

椿の花びらは紅花の赤で染められる。だがその工程はおよそ一年の時を要する。

三月の下旬に種を蒔く。四月、五月は間引きをして苗の生長を待つ。七月に入ると、栽培をお願いしている伊賀の榮井さんから、摘み取りは上旬か中旬かの報せがある。朝早くに畑へ向かって花びらを摘む。花は摘み始めてから、夏の強い陽光をあびて赤味をましている。紅花は干して冬の染色まで待っている。

同じ頃、紅花の輝くような赤色を表すに欠かせない烏梅造りうばいが行われている。奈良市月ヶ瀬村の中西さん宅である。

六月下旬から七月上旬にかけて熟した梅が木から落ちる。それを煤でまぶし、おがくずを燃やして一昼夜燻すのである。

これでおおかたの準備が整ったかと思う。いや、まだある。

十月、近くの田から稲のワラがやってくる。有機無農薬で育てられ天日干しされたワラが、小型トラック五台分がそれ以上やってくる。工房の前庭にしつらえたカマドで、毎日毎朝燃やしてワラ灰とする。冬に灰汁として、紅花から美しい色をだすためである。

植物染めはかように手がかかる。けれども美しく、尊い。私どもは先人の遺した手技を尊び、記録を読み解くことによって、この道を歩いているのである。未来を美しい色で満たすために。

左上：奈良県薬師寺で、5月5日に催されるげんじよさんぞう えたいさい玄装三蔵会大祭。1992年に復興され、衣装と道具を吉岡さんが制作。古の色彩を復元した。写真は、迦楼羅天の伎楽面をつけた姿。

右上：吉岡さんが染めた和紙と、和紙で作られた造り花。p.59～61の反物とともに、ヴィクトリア&アルバート博物館に、永久コレクションとして収蔵された。

上：奈良県東大寺で8世紀より毎年欠かさず行われている大切な法要、修二会。十一面観世音菩薩に天下泰安を願う。3月1日より2週間にわたって行われる。写真は観音さまにお供えする水を汲む有名な「お水取り」の場面。

(p.065)

いにしへ「古の色を超えたことは一度もない。

それほど日本の色は美しく、尊いのです」

東大寺の修二会で、十一面観世音菩薩に捧げる椿の造り花。染司よしおかで和紙を染めて納め、毎年2月23日に僧侶らが「花ごしらえ」をする。